

## 自作の教材を活用したリズム同期の指導

齋藤一雄

### 目的

歌唱教材をリズム同期の指導に活用してみたところ、曲を知っている、歌詞とリズム同期のパターンが一致している、歌うことより手拍子等で同期する活動は親しみやすいなど、有効なことが発見できた<sup>1,2)</sup>。しかし、リズムパターンが複雑だったり、変化が大きかったりするなどの問題点もあった<sup>3)</sup>。そうだとすると、リズムパターンやフレーズを理解しやすく、手拍子する部分がとらえやすい8小節の短い曲を自作すると、リズム同期の指導を能率的に行うことができるのではないかと考えた。

本研究の目的は、小学校特殊学級の音楽の授業のなかで、教科書掲載の歌唱教材と自作した歌唱教材のリズムパターンに手拍子で同期する課題を設定し、自作の教材の有効性と問題点を明らかにすることである。

### 結果

自作教材「それ拍手!」「きゅうりがトン」は、8小節の短い曲で、80bpmのテンポを設定すると、興味をもちながら同期しようとする取り組みがひきだせた。さらに、正確な同期反応を引き出すためには、同じリズムパターンをくり返す構成にしたほうがよいこともわかった。逆に、いろいろなリズムに同期できるようにする設定も必要な児童もいた。さらに、児童の実態に合わせて構成やテンポ設定を変えることも必要であり、指導計画のなかでどのようにリズム同期の課題を配列していくかを整理しつつ、歌詞と動作を結びつけたわかりやすい、反応しやすい、やってみたくなるような自作教材を用意していくことが次の課題となった。

### 方法

小学校知的障害特殊学級と情緒障害学級に在籍する1～6年生の6人を対象とした。この学級の児童は、学校や学級の生活には慣れてきたが、まだまだ、自分で表現する活動において自信をもった表現は少なく、精神発達も2歳～7歳と幅広い実態がみられる。しかし、音楽活動には興味や関心があり、それぞれに楽しむことはできている。

授業は、2004年10月に小学校多目的室で6回行い、毎回VTR録画した。指導は、筆者、音楽担当、

特殊学級の計5名で行った。

授業は、季節や行事、生活との関連があり、身近に聞きなじんでいる教材を中心に、フォークダンス、歌唱教材によるリズムパターンへの同期反応、ゲーム、テーマをもったリズム運動、そして、鑑賞+後拍打ちで構成した。

分析対象の教材は、教科書掲載曲「手をたたきましよう」(手拍子と足踏みによる拍打ち)補作詞小林純一、作曲者不詳で、養護学校用音楽科教科書おんがく☆☆に掲載されている4/4拍子16小節の曲である。自作教材は、「それ拍手!」(四分音と八分音の拍打ち)4/4拍子8小節の短い曲である。同期が可能になる段階の児童には長すぎず、短すぎない小節数として8小節を選んだ。また、歌詞と動作のイメージが重なるように、動作の準備の間を用意し、さらに、児童が思わずやってしまうような動作やかけ声をいれた。自作曲「きゅうりがトン」も、4/4拍子8小節の短い曲である。基本的には「それ拍手!」と同様な考え方で作曲したが、落ち着いた雰囲気の中で、四分音と四分休符の組み合わせによるリズムパターンに注目して同期することを課題とした。

### 内容

#### 1. 自作教材「それ拍手!」について

「それ拍手オーッ」のこぶしをあげて「オーッ」という部分への反応は、予想よりもよい反応がみられ、元気のよいかかけ声やこぶしを突き上げる力強い動作が観察された。しかし、こぶしをあげた直後に、手拍子をする課題であったために、リズムパターンの最初の拍に入れられないケースが多くみられた。

リズムパターンは、四分音の連続と八分音の連続を課題としたが、パターンの最後に四分休符を加えて、半終止と終止がわかるようにした。そこで、8拍連続のリズムパターンへの同期と4拍を1パターンとして同期できた割合を算出した。

その結果、一人を除いて共通してみられたことは、四分音の連続パターンにおいて、前半の4拍連続のパターンよりも、後半の休符が入るパターンのほうが同期できた割合が大きかったことである。前半部分では、かけ声とこぶしをあげる動作が直前にあり、1拍目から手拍子に入れなかったことが影響している児童が多かったことによる。

また、四分音の連続パターンよりも、八分音の連続パターンのほうが同期できた割合が小さくなっていったことも共通してみられた。しかも、同期できた割合が20%以下であった。

## 2. 自作教材「きゅうりがトン」について

落ち着いた雰囲気の中で、四分音と四分休符の組み合わせによるリズムパターンに注目して同期することを課題とし、歌詞と「トントントン」と切る音のイメージはすぐにつかむことができ、児童6人とも取り組むことができた。

8拍のリズムパターンに対する同期については、一人がほぼ100%でき、3人が30～50%できていた。一人は、前半のリズムパターンに対しても、後半と同じリズムパターンで手拍子することがみられた。全体として、後半のリズムパターンへの同期のほうが前半のリズムパターンよりも、若干であるがよい傾向がみられた。

次に、4拍ずつのリズムパターンについて同期できた割合をみると、前半の3拍打って1拍休みのパターンより、1拍打って1拍休みのパターンのほうがよい傾向がみられた。また、8拍のリズムパターンを4拍に分けてみたわけだが、これも後半の部分がよい傾向がみられた。

## 3. 教科書掲載教材「手をたたきましょう」

「手をたたきましょう」において、「タンタンタン」「アハハ」などの擬音の部分に手拍子で同期した。一人は、「タンタンタン」「アハハ」とともに約80%以上同期でき、二人は休符の部分も手拍子してしまったり、他のことに気がいってしまい手拍子しなかったりすることが多く、4～20%同期できただけであった。他は、最初の「タンタンタン」では30～50%であったが、「アハハ」の部分では60～100%近く同期できていた。

この「手をたたきましょう」の曲は、皆よく知っていて、歌詞に合わせて身体表現したことがある。そのことにより、「アハハ」の部分で手拍子するという課題は、歌詞と動作を合わせるということから若干はずれているが、リズムパターンをとらえて手拍子することができたのではないかと考える。

## 4. 「きゅうりがトン」と「手をたたきましょう」におけるリズムパターンへの同期の比較

自作教材「きゅうりがトン」と歌唱教材「手をたた

きましょう」におけるのリズムパターンへ同期できた割合を比較した。

全体としてみると、「笑いましょうアハハ」に同期できた割合が高い児童と、「きゅうりがトン」に同期できた割合が高かった児童に分かれた。一つは、「笑いましょうアハハ」の「アハハ」の部分がとらえやすく、手拍子するタイミングも入りやすかったのではないかと、また、「きゅうりがトン」が全体で8小節の曲で、曲想ものんびりした感じであり、リズムパターンについてもとらえやすかったのではないかと考える。

知的障害児のリズム同期のための教材として、自作曲も既製曲もそれぞれよいところもあり、曲の作り方や構成の仕方によって、同期の状況に影響を及ぼすのではないかと考えた。

## 引用文献

- 1) 齋藤一雄 (2004)「養護学校用音楽科教科書の教材による授業」『上越教育大学研究紀要』23 (2), pp. 1-11
- 2) 齋藤一雄 (2004)「知的障害児のリズム反応における歌唱教材の活用」『上越教育大学研究紀要』24 (1), pp. 77-87

## 参考文献

- 文部科学省 (2002)『おんがく☆ おんがく☆☆おんがく☆☆教科書解説』東京書籍
- 大瀧 綾 (2005)「知的障害児のリズム同期反応における一考察—公立小学校の実践をもとに—」上越教育大学学校教育学部平成16年度卒業研究・論文
- 齋藤一雄 (2003)「養護学校小学部用音楽科教科書の分析」『学校音楽教育研究』Vol. 7, pp. 189-193
- 齋藤一雄・星名信昭 (1996)「養護学校小学部用音楽科教科書の教材分析」『上越教育大学障害児教育実践センター紀要』第2巻, pp. 26-36
- 吉田 豊 (1988)「精神遅滞児のリズム再生—モデル刺激の段階的提示による検討—」『発達障害研究』, 10 (3), pp. 62-71